小学校１年生のカリキュラムについての一考察

～幼稚園での学び方を小学校に継承し発展させるために～

学校教育専攻
幼年発達支援コース　　指導教官　佐々木　宏子
漆原　和美

【はじめに】

子どもの発達には連続性があるのだから，当然，幼稚園・小学校と教育にも連続性が必要である。しかしながら，現在の小学校教育は子どもの主体的な学習や活動を追求しながらも，教科書中心の教育という傾向があると思われ，子どもの主体性を尊重し保証する幼稚園（保育所を含む）の教育との連続性がうまく考慮されていないのではないだろうか。小学校教員である筆者が本大学附属幼稚園で保育実践等を行ったときにも，子ども観や教育の方法などに段差を感じた。そこで，小学校１年生の子ども達が感じる幼稚園と小学校の具体的な段差をとらえ，その段差を生じさせている原因を明らかにする必要があると思われた。また，小学校１年生のカリキュラムについて，幼稚園教育の理念や方法を継承するべきであると考え，本研究課題を設定した。

本研究では，公立小学校１年生のある学級の実態を参与観察し，その観察結果を分析・考察することによって，幼小教育の段差とつながりを把握しようとしている。そして，それらから幼稚園の生活と連続する小学校１年生のカリキュラムに求められるものを明らかにすることを目的としている。さらに，公立小学校で実施可能な，幼稚園で培われた学び方を継承し発展させることができる１年生のカリキュラムを開発しようとしている。

【研究の概要】

１　幼小教育の段差とつながり

公立小学校１年生１学期の子ども達を観察した結果，次のような点に，子ども達が段差を感じていると思われた。どの事例においても，子どもの主体性は十分に発揮されていなかった。

○　みんなが同じ教材で学習し，子どもが教材を選択できないこと
○　教師主導で，みんなが同じペースで学習する学び方
○　「子ども－教材－教師」という関係性
○　教師と子どもの「できる」の違い
○　子どもが納得しないルールの存在

また，以下のような事例では，子ども達が，幼稚園での学び方を小学校の生活に生かしていると考えられた。いずれも，教師主導というよりも，子ども主体の展開であり，子ども同士のかかわりが見られた。

○　一斉授業で，子ども同士が話し合ったり評価し合ったりして，かかわり合って学ぶ
○　一斉授業で，自分なりの学び方を発揮して学ぶ
○　友だちの心に寄り添って活動する
○　人間関係を調整しながら活動する

２　１年生のカリキュラムに求められるもの

１のように，幼小教育の段差とつながりを把握したことから，小学校１年生のカリキュラム

に求められるものを次のように考察した。

○　子ども主体の一斉授業

伝統的な教科の体系を重視した知識伝達型の一斉授業ではなく，子どもが主体性を発揮できる一斉授業が求められる。子どもの興味や関心と各教科等の内容との接点から授業を立ち上げ，学習指導要領に示された内容は要所で押さえる。

○　子ども主体の単元の立ち上げ

今，目の前にいる子どもの実態を，過去にわたってとらえることから単元構成を行うことが望まれる。そのために，幼稚園での生活の実態を知ることが求められる。教科の枠を超えた総合的な単元構成が必要になることもあると思われる。

○　個性的な学びが認められる活動

子ども達は主体的に学ぶことができるのだと信じて，子ども達の興味や関心に合う環境を設定し，できるだけ自由に活動させる。一人の子どもの個性的な教材との向かい方を教師が認めると共に，それが周りの子ども達に響いて対応し合うような活動が求められる。

○　教師に求められるもの

・　子ども自身が活動を選択できるような対応
・　子どもの気持ちを受けとめて共感し，子どもと同じ気持ちになるような対応
・　わかったことやできたことの意味づけをしたり，言葉に置き換えて認知させたりすること。

3　幼小の学び方をつなぐ「生活総合型学習」

１・２から，小学校１年生の子どもには，従来のように各教科等の枠組みの中で，教師が提供する教育内容を系統的に学習する「教科書主導型」で学ぶよりも，子ども自身がその生活の中から立ち上げる活動を通して，主体的に「生活総合型」で学ぶことがふさわしいと思われた。

そこで，「生活総合型学習」をカリキュラムの柱として，各教科等の内容も学べるようにすることを考えた。生活総合型学習では，目の前にいる子ども達が，その生活を繰り広げる地域や学校の環境と出会うことによって生まれる活動を通して，自分達が選んだ学習材に，個性を生かして向かい合う。各教科等の内容だけに限らず，生き方や人間関係まで総合的に学ぶ。

また，学習指導要領（1998）でも，指導計画の作成について，学校の創意工夫を生かすことを求めている。子ども達と教師が共につくり出す生活総合型学習カリキュラムのような独自性のあるカリキュラムの実施が公立学校でも可能であると思われる。

【おわりに】

本研究は，小学校の一教員が幼稚園教育の実際を知ることから始まった。幼稚園教育の理念を知って，幼稚園の生活を実際に見て，幼稚園の教師が何を見とって大事に育んでいるのかに気付いて初めて，教科書に頼らない教育の可能性を信じることができるようになると思われる。教科書のない生活でも，子ども達は確かに学んでいるということを実感しなければ，子ども達の主体性を信じることはできないだろう。それが子ども理解や授業方法などの幼小連携への第一歩であり，子どもの主体性を尊重し保証する幼稚園で培った学び方を小学校に継承し発展させるための小学校１年生のカリキュラム開発のスタートであろう。筆者は子ども達と共に生活しながらカリキュラムを修正し，さらに開発していくという大きな課題を残している。子ども達と共にカリキュラムをつくり上げながら，実践することを楽しみにしている。